

超・個の時代へのメッセージ

プログラム委員長
大槻 繁

Symposium2023 では AI とシステムの社会的意義をテーマとし、各発表・論文執筆をしていただいた。ここでは、全体としてのメッセージについてまとめてみようと思う。また、サブテーマとして掲げた「超・個」についても最後に考察を加えておくことにする。

メッセージとしての「シン社会原論」

シン社会原論

Principles of New Society

To free ourselves from the spell and build a new society, we need to rethink the concept of the individual and shift to a paradigm based on a new sense of values. We must rethink the concept of the individual and shift to a paradigm based on a new sense of values. We are convinced that the following interests and teachings are promising. We believe the following interests and teachings are promising.

AI狂想曲に惑わされず、呪縛から解放され、新たな社会を築いていくためには、個の概念の見直しや新たな価値観に基づくパラダイムにシフトしていかなければなりません。我々は、以下の関心と教えが有望であると確信しています。

- 1: 社会は、超・個（自律的実在）の相互作用（コミュニケーション）の連鎖から成る
1: Society consists of a chain of interactions (communications) between hyper-existences (autonomous entities).
- 2: 組織は、社会的意義を表明した創造的意図を持ち、目的を共有する
2: The organization has a creative intent with a stated social significance and a shared purpose.
- 3: ヒトは、認識の変化を伴いながら組織経営・社会全体を統御する
3: Humans control (harness) organizational management and society as a whole with changing perceptions.
- 4: IT・AIは、組織運営活動の手段・資源として配置・活用する
4: IT and AI are deployed and utilized as means and resources for organizational management activities.
- 5: 倫理・道徳面から社会・組織活動の健全性を担保する仕組みを構築する
5: A mechanism to ensure the soundness of social and organizational activities from ethical and moral aspects will be established.

上記を推進する基盤化・複雑系・知働化・認識論・組織論・経営論・人財論などの広範で、かつ、相互補完的アプローチが、新しい物語を生み出し、新たな地平を切り開いていくことでしょう。

The broad and complementary approaches to fundamentalization, complex systems, intellectualization, epistemology, organization theory, management theory, and human resources that promote the above will create new narratives and open up new horizons.

大槻繁, 萩原正義, 濱勝巳, 松田裕幸, 飯泉紀子, 鎌倉千恵美, 北野弘治, 本橋正成, 羽生田栄一, 野口隆史, 高野明彦, 米沢和希, 位野木万里, 塩田英二, 遠藤修, 上原 誠, 高柳謙, 高橋雅宏, 水越明哉

Shigeru Otsuki, Masayoshi Hagiwara, Katsumi Hama, Yukoh Matsuda, Noriko Iizumi, Chiemi Kamakura, Kouji Kitano, Masanari Motohashi, Eiichi Hanyuda, Takafumi Noguchi, Akihiko Takano, Kazuki Yonezawa, Mari Inoki, Eiji Shiota, Osamu Endo, Makoto Uehara, Yuzuru Takayanagi, and Akiya Mizukoshi

2023年12月2日 新宿にて
December 2, 2023 in Tokyo (Shinjuku)

1: 社会は、超・個（自律的実在）の相互作用（コミュニケーション）の連鎖から成る

シンポジウムで重きを置いている観点が「社会」であり、どんなテクノロジーも社会との関わりで初めて価値がでてくる。社会学では社会の構成単位はコミュニケーションであり、こういった考え方は新実在論とも親和性が高い。「超・個」という概念は、人・組織（セル）・システム（AI）などを抽象化した自律的実在のことであり、今後、理論を構築したり、実践的手法を探究していく際に意識しておくべき哲学である。

Cトラックの「個と社会との成長」では、対話と弁証法といったコミュニケーションに関わるトピックスを扱い、その本質に迫っている。基調講演の AI について考

えるべきことという中でも、AI エージェントとその相互作用やコミュニケーションが今後注力すべき領域として提示されている。

2:組織は、社会的意義を表明した創造的意図を持ち、目的を共有する

これは「思考の技法」の一節で、普遍的な言明である。とかく昨今の企業不祥事は目的の消失に起因していると思われ、一つの戒めの言葉として意識しておくといっている。大切なことは、目的を社会的意義という外部視点で表現することである。テクノロジーにしろ、組織経営にしろ、それが文脈の中でどのような価値生み出すのかということに言及する必要があるということが、社会視点を採り入れる要点である。

目的ファーストという考え方は、Aトラックの「理論と技法」の中で、解説されている。また、その実践例をBトラックの「経営と実践」で紹介されている。優れた経営者は、無意識のうちに目的を策定している。こういった当たり前の事項をあえて意識しながら反省してみる活動は意味のあることと考えられる。

3:ヒトは、認識の変化を伴いながら組織経営・社会全体を統御する

事業環境の変化が激しいこと、事業を取り巻く環境が複雑であることといった状況からアジャイルプロセスでは、計画駆動より変化対応に価値をおくべきであるという教えがある。所詮、全てを制御することはできないし、問題やその解も刻々と変化していく。従って、認識が変化することや、時間とともに状況が変わっていくこと自体を織り込んでいかななくてはならない。システムに関しても、仕様化と実装とが並行して進められていくでしょうし、組織経営でもオペレーションをしながら次のステップの企画を立てていかななくてはならない。こういった状況に対応していくことを複雑系の概念である「統御」という言葉で表現している。

ヒトの発達や成長のモデルには、多くのものが提唱されているが、社会性や認識の変化についての能力を織り込んだものが有用だと考えられる。Aトラックでは、そのヒトの社会性の評価モデルが提唱されているし、Dトラックではスキルやマインドセットに関する体系が提示されている。おりしも、DX人財の不足が叫ばれてきているが、こういった大衆的な底上げ事項と同時に、優れた経営センスを持つ人財の選別についても検討していく必要がある。

4:IT・AI は、組織運営活動の手段・資源として配置・活用する

事業を企画していく際の順番として、資源（リソース）は最後に配置するという原則がある。IT や AI も例外ではなく、あくまでも手段であることを忘れてはならない。判っていながらも、どうしても手段に振りまわされることはよく起こることである。まして、生成 AI は、おもちゃのように遊ぶことから入ってしまう傾向があるが、こと事業については、IT・AI や人財の配置を経営判断するのと同じ位置づけ

にしておかないと、組織経営の本質を見失ってしまう。

あくまでも事業の中心は、IT・AIではなく、それ以外のところに存在する。ひとたび事業を推進していく際には、資源の最適化の観点が重要であり、かつ、事業全体のスケールアップも図っていかなくてはならない。その際に、IT・AIの活用はキーになる事項である。

5:倫理・道德面から社会・組織活動の健全性を担保する仕組みを構築する

組織活動で、目的を社会的意義やお天道様に対して恥ずかしくないものということをも銘打っているが、実際の業務定義を行い、オペレーション段階に入ると、目的を見失ったり、局所的な最適化、悪質な場合には、粉飾、手抜き、モレ・ヌケなどが発生することがある。従って、何らかのガバナンス、不正検出、さらには、社会的意義を疎外していないかを検出する仕組みが必要になる。倫理・道德の問題というのは、定式化が難しいために、第三者的な評価の仕組みを構築していくことが要請されている。

新実在論の提唱者であるマルクス・ガブリエルは、欲望に満ちた資本主義を脱し、倫理・道德資本主義に移行していかなくてはならないとしている。次世代に向けての理論や経営手法を検討していく際にも、昨今、多くの不祥事を引き起こしている社会的制約、抵抗勢力、呪縛などについてしっかりと見極めていかなくてはならない。

新実在論の意義と「超・個」について

シンポジウムのサブテーマにキーワードとして掲げている「超・個」は、ガブリエルの提唱している新実在論をベースにした我々の新造語である。簡単に新実在論の言葉の定義をまとめると以下ようになる。

- 〈新実在論〉
 - ✧ 我々は、物および事実それ自体を認識することができる
 - ✧ 物および事実それ自体は、唯一の対象領域に属するとは限らない
- 〈世界〉は、存在しない
 - ✧ 形而上学：世界とは何なのかを体系的に探求する
 - ✧ 宇宙：自然科学の対象領域
- 〈世界〉：〈意味の場〉の〈意味の場〉
 - ✧ 〈意味の場〉：何かがそこに現れているという状態
 - ✧ 〈存在〉：何らかの意味の場の中に現れる現象

- ◇ 〈現象〉：現れ、出来事（物質的）、存在
- ◇ 〈意味〉：対象が現象する仕方
- ◇ 〈対象〉：真偽に関わりうる思考によって考えることができるもの
- ◇ 〈実体〉：性質の担い手

ガブリエルの『超越論的存在論』は、カントのドイツ観念論を基底とし、それを展開したブランダム、ピピン、マクダウェルの超越論的認識論と、パディウ、メイヤーのフランス存在論との中庸として位置づけられる。シュリングとヘーゲルの考え方を多く採り入れている。〈存在〉という概念を、事後的必然性。すなわち、存在を認識した時に、それに先立つ前提存在（創造者？）が何かということ希求しているのが特徴である。

ガブリエルの哲学は、カントのドイツ観念論の存在神学的要素から、ハイデガーの歴史存在概念へ、そして、一元論やデカルト的二元論（心身二元論）ではなく、もっと多様で多元的な見方に推移してきている。特に、昨今の AI テクノロジーの発展による自然主義的な世界観から距離を置き、人間的な精神・意志・認識の問題を俯瞰的に見ている点が特徴である。

一方で、『思考の技法 / セル組織論』では、意味の場として、自然科学、社会、経営など多様なものが扱われる。このいくつかの意味の場として、〈実行〉や〈計算〉といった実体を対象とすることが中心であり、その存在概念として〈超・個〉と呼ばれる現象を扱うことにしている。これは、具体的には、人財、組織、集団、セル、AI、ITなどを抽象した概念に対応している。

謝辞

シンポジウム開催に当たっては、準備・運営から事後のまとめ、プロシーディングスの作成など各方面の方々にお世話になりました。特に、スピーカーとして登壇していただいた方々には、発表講演のみならず、プロシーディングスの作品制作にもご協力いただきました。

シンポジウム企画の核になっているのは、アジャイルプロセス協議会 / 知働化研究会の定期会合（通称：缶詰会）であり、主催は、アジャイルプロセス協議会に負っており、さまざまな支援をしていただきました。この業界の学会・協会・団体の協賛も得ることができました。工学院大学の位野木教授、研究室の方々にも会場運営でお世話になりました。陰に陽に多くの方々のご支援の賜物で、ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

